

マクダウェルの『心と世界』はどのような議論によって概念主義を打ち出しているのか

小川 祐輔(Ogawa Yusuke)

筑波大学

ジョン・マクダウェルは、その主著『心と世界』(MW)において、「近代哲学に特徴的な不安」、つまり私たちの心は世界に向けられていないのかもしれないという懐疑論の「治療」を試みている。この問題にたいする彼の診断をごく大雑把にだがまとめてみると、次のようになるだろう。近代哲学は心と世界を明確に二分し、心を概念的・合理的なものとして、そして世界を非概念的・法則的なものとして特徴づけた。この描像は心と世界の本性を適切に捉えてはいるのだが、同時に、どうすれば互いに異質である心と世界が触れ合えるのか(とくに、どうすれば心の領域に属する思考が世界からの干渉である経験によって正当化されたり棄却されたりするのか)を理解しがたくしてしまう側面もあった。しかしこの難点は、多くの哲学者が見落としてきたある考えかたに気付けば解消する。それが、経験にはすでに概念的 content が備わっているという概念主義 *conceptualism* なのである。

ではこの議論は成功しているのだろうか。それを問おうとすると、事情は若干複雑である。というのも、MW の話題が上記の問題を中心としながらも多岐にわたっていること、マクダウェルが哲学にたいして(多数派とは言いがたい)静寂主義的な態度から治療的なアプローチを試みていること、そして MW がどちらかといえばそのアプローチの全体像を描き出すことに力点を置いているようにみえることなどから、問題の議論を一つの論証としてみようとしたときに、その構造をみてとりにくくなっているように思われるのである。

そこで筆者は、この議論を適切に評価するうえで、この議論がそもそもどのような構造をしているのかを精確に整理しなおしてみることが有意義なのではないかと考えた。具体的には、彼の治療的アプローチの鍵となる概念主義に焦点を当てつつ、それがどのような前提からどのような論証を経由して打ち出されているのか、そしてそこに含まれる諸論点にはどの程度の正当化が与えられているのかを、MW の記述に依拠しながら明らかにしておこうというわけである。

このような整理および再構成の作業は、もし成功すれば、MW の議論の説得性(懐疑論の治療が成功しているのかどうか)を正しく見極める助けとなるだけでなく、この議論に共感を覚えた人たちが今後取り組むべき課題の所在を明確にすることにも資するだろう。